

## 第19回 車寅次郎氏に学ぶ

IT生

「男っていうものはな、引き際が肝心よ」との名言を残したのは車寅次郎氏である。

車寅次郎氏というのは架空の人物で、映画「男はつらいよ」の主人公である。寅次郎氏はテキヤであり、毎回旅から故郷の東京・柴又に戻っては、マドンナとの恋愛騒動を通じて、家族や町の人を巻き込み騒動を起こす。それが結果として、マドンナら登場人物に「生きるとはどういうことか」ということを暗示し、世上の迷える人々の助けになるという筋書きとなっている。



無用の人の「手本」だった車寅次郎氏

冒頭に紹介したセリフについて作家の井上ひさしが解説を試みている。いわく、「上品な恋愛観」だという。その根拠として、続くセリフを挙げる。

「何も言わない、眼で言うね。お前のこと愛しているよ。すると向こうも眼で答える。悪いけどあなた好きじゃないの。そこでこっちも眼で答える。わかりました、それじゃあいつまでもお幸せに。そして背中を向けて黙って去る。…それが日本の男のやり方よ」。

引き際は「負け」を意味しない。いってみれば、「君子危うきに近寄らず」の精神である。「戦わずして勝つ」ともいう。このことを実行するには、教養が必要である。教養を身につける方法は、人それぞれである。寅次郎氏のように15歳で家を飛び出し、40歳で故郷は東京の柴又に戻るまで、幾多の旅の風雪にさらされる方法もあれば、若いころから武道やスポーツなどを通じて心身をもまれる精神鍛錬もひとつ。学問に身を投じ、哲学を論じるのもひとつ。

ただ、寅次郎氏のように「無用の人」になる覚悟は必要だ。無用の人とは「権力や暗示、習慣、常識、独断、市場、評判に屈しない」人物をさす。いいかえれば、「想定外の危機に強い生活人」ともいえる。宮沢賢治の「雨にも負けず」の世界観ともいいだろう。唱歌「ふるさと」にも描かれている。

この「無用の人」になる覚悟を教えることこそ、教育のなすべきことだろう。それがなくなつた今、相次ぐ自然災害の脅威を前に進められている「防災教育」が目指すところとも一致する。

大自然の前には、人間はおのずと「無用の人」にならざるを得ないからである。

(平成29年2月)